
尖角の超短編集//第二弾！！

尖角?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

尖角の超短編集／／第一弾！！

【Zコード】

N4422U

【作者名】

尖角？

【あらすじ】

短編の小説から詩からなんやうまで、いろいろと作者が暇なときあげていくものです。

ちなみに、1つ1つに関連性は全くないです。第一弾です（^_^

あなたに捨てられた私に、ひとつか無償の愛を捧げてくれ。 (前書き)

第一弾です。

前作が好評だったわけではあります。けれど書いていきたいです。

前回は10話だったので、今回は20話とこうじで……。今日は小説をメインにしたいです。どうぞ……。

あなたに捨てられた私に、ひとつか無償の愛を捧げてくれ。

『元カノなんて言わないで?』

私はそう、切に願う…。

私が振られた理由は“お節介”だから…。

彼にとつて私は鬱陶しい存在でしかなかつたらしく、私は付き合つて半年で振られた。

私が尽くした^{すべて}が邪魔なものでいかなかつたなんて…。

そう知つた時の私は一体どんな顔をしていたのだろうか?

そう思つとまた悲しく思う。

振られた当初は“辛い”といつ葉しか出でこなかつた。

けど今は違う。

無しか思わない。

良かれと思つてしたことがダメだつてわかつた時、

尽くした人に毛嫌いされた時、人間といつ生き物はいとも容易く崩れ落ちる。

他の人なんて知らない。

ただ自分はそうだった。

今はもう、彼のことを思い出したくもない。

彼は私を見捨てた。

理由はウザいから。

ただそれだけ…。

悲しいなんてレベルじゃすまなかつた。

もう人生が終焉を迎えたと思った。

私はそれぐら^いにひどく^{つや}疲れ、涙を流し続けた。

嘘でもいいから「好き」だと言つてよ。

例えあなたに他がいても、私は何も言わないから。

だから私をお願い傍においてよ。

愛さなくてもいい。

愛なんていらないから…。

私に捧げる笑顔じゃなくても、それが見れれば私は満足だから。

泣かないでいられるの。あなたが傍で笑つてくれるな。

悲しくなんてないの。ただし切ないだけ。

だからいかないで? おいてかないでよ?

私にはあなたしかいないのだから…。

これだけ言つてあなたは振り向かないの?

それは愛? それとも嫉妬?

私がかわいすぎるから? それとも私が憎いから?

他の男とそんなに話すことがいけないこと?

ただの友達なのに…。

人生であなた以外を愛したことなんて家族以外ないのに…。

それでも私を見下すの?

天にも見捨てられ、あなたにも見捨てられた私はどうに行けばいいの?

お願いだから傍においてよ。

私はあなたがいないとダメなの。

私はあなたしか愛せないの…。

だから私に無償の愛を捧げてよ。

あなたに捨てられた私に、むづか無償の愛を捧げて下せ。 (後書き)

矛盾はわざとさせています。

だからそこは気にしないでください。

主人公となつた女の子が矛盾するほど、

狂うほど好きだったといつことを表したかったので(笑)

都会の中でも、永遠にあなたを探し求めぬ。（前書き）

変な内容です（笑）

都會の中で、永遠にあなたを探し求めん。

「今日はどうしてるの?」

私は都會の信頼待つでそう呟いた。

彼氏と別れたのはもうずいぶん前。

それは1ヵ月前だつたかもしぬないし、それは1年前だつたかも
しれない。

そんなことはもう、忘れてしまつた。

今日も私は都會を彷徨つ。

あなたを探し出すために。

私を置いて、どこかに行つてしまつたあなたの残り香を追いなが
り。

「どこなの?どこなの?」 ひと呟きながら。

人は私を怖がるの。

けれど私は氣にしてなんかいないから。

あなたと共に過ごすことのできる毎日が、私の下に戻ってくるの
ならば…。

それだけで、私の中から“恐れ”はなくなるの。

だつてそれは、すべてあなたの為だもの。

都会の中でも、永遠にあなたを探し求め。 (後書き)

短いですね！？

愛といひせりま、俺達の仲を取あつた。(前書き)

愛が欲しき……。

愛といつやつは、俺達の仲を引き裂いた。

俺は毎日、自惚れていた。

ナコナコすら告げることのできなかつた、あなたへの愛。

悪い事ばかりだった、俺達の愛。

それは恋から始まり、痛みで終わつた愛。

苦しい毎日。

それは夢中で過ぎて行く。

いつの日だつたか？

とても素敵なあなたに出会えたのは。

大切だと思っていた俺達の縁。

その時は、この世界がとても美しく思えた。

君が好きだつたものを俺が好きになり、

完璧といつて日常の中で、俺達は本音を分かち合つた。

病気になつた俺の身体。

君の言葉に返事ができない。

本当にすまないとと思つ。

いくら謝つても、俺の人生は戻つてこないのに。

どうしたらいいんだ？

どうすれば幸せを掴めるんだ？

炎より熱い俺の利己心が、俺の魂を焦がしてしまつ。

もう、約束できないよ。

もう、俺は神に誓えないよ。

一日中、寂しい気持ちを堪えながら、

あなたから届く手紙を待つてゐる。

あなたの事情に、俺は涙するよ。

この世界でも、俺の声が響くのなら、

俺は誰よりも大きな声で愛を叫ぶよ。

俺の切ない声が聞こえるかい？

仲間たちよ、涙を拭え。

俺は笑つてゐる君の方が綺麗だと思つよ。

そして、本当にほめん。

俺の利口心は燃え尽きてしまってそうだ。

どうしたらいい？

どうすれば俺達の愛は救われる？

約束してくれ。

神にじゃなく、この俺に。

君はぼうっと、一人で立っているけれど、心配しないで。

寂しいけれど、誰でもそうだから。

横を見て、いらんよ、君は独りじゃないよ。

昔、君が言っていたように、人生とは本当に笑えるものだよ。

まるで、はらはらする火遊びだ。

夜闇に打ち上げられた悲しげな花火。

悪戯な障害物。人生という絆。

その全てを心に刻むから。

どうか、みんなで祈つておくれ。

どうか、みんな泣かないでおくれ。

愛とこひしま、俺達の仲を引き裂いた。（後書き）

この文の参考は、曲です。
参考にあるのも著作権？

HATE YOU・(前書き)

長い長い文字の羅列から、すつきりした横文字に、
そんな題の変化の中、変わることのない俺自身。。。

HATE YOU .

私はあなたが嫌い。

『あー全然来ないなあー』

あなたは、私を待たせるだけの存在。

『今日はなくなつたのかな?』

そうやつて、携帯を見て、デートの中止の知らせを待つ。

しかし、メールも着信も“0”のまま…。

変わらない、1時間。

変わらうとしない、あなた。

もう疲れたわ。

私はそう思い、あなたに電話をかけるの。

あなたは本当に嫌な人だわ。

何回コールしたって出てくれない。

私の代わりと遊んでいるんでしょ？

あなたを待つのには飽き飽きだわ。

あなたと会う必要がないのに待つだけ。

あなたと会う必要がないのに待つだけ……。

そんなの、本当にむかつくわ。

あなたののような男は沢山いるもの。

ただ、あなたの欠点が見つからないだけ。

我慢して愛するのには、もう疲れたの。

あなたの記憶は待っていたつてことぐらい。

我慢しても、我慢しても、変わらない孤独。

“愛してる”の一言が聞ければそれでいいのに…。

私とあなたは、無意味なの。

水と油…。

ただそれだけの関係。

交わることはない、永遠の時。

満たされることない、私の愛。

本当にむかつくわ。

私のプライドを捨てさせておいて、あなたがしたのは何?

私は捨てられた子猫。

私のどこがいけないの?

全てを捧ぐ忠誠心?

私はとても悲しいわ。

私の人生はあなたの為にあるものだと思っていた。

孤独という2文字が、私を苦しめる。

愛という切なさが、私を貶める。
おとし

私とあなたの関係を、とても滑稽に思つわ。

あなたは本当に嫌な人。

あなたが開く口の中は、嘘が半分、残りは偽。
いつわり

我慢しても、我慢しても、変わらない愛。

いつか、あなたも同じ田に合つでしょ。

傷ついて初めてわかる、私の気持ち。

本当にむかつくわ。

この世にハッピーホンダがないことがよくわかった。

馬鹿みたいに無垢な私。

いつまでも変わることのないあなた。

私は変わることにしたの。

あなたに鎖がれる毎日は、もついらぬ。

あなたと出会えただけで、私は幸せだった。

やう思えば、少しは楽だもの。

あなたは本当に嫌な人。

あなたと別れれば、心はすつきりするのかな？

骨の奥まで沁み込んだ、あなたの記憶。

私はこれから、それを背負つて生きていくの。

HATE YOU・(後書き)

歌詞の転載はダメなのですが、基にして、違う文を書くのはいいのでしょうか？

夢中（前書き）

今回はリクエストいただいた、不思議系です。

深い深い夢の中、

俺は現実的な夢を見た。

俺の名前は、とがしきりょうへい
梅敷亮平。

ごく平凡な、中学1年生である。

そんな俺には、ただいま好きな人がいるのである。

名前は、久住祥子。くすみじょうこ

彼女は実に可愛らしい。

その顔も、その仕草も、どれをとっても女の子らしい……。

俺はそんな彼女を好きでいる。

そんな俺が、彼女と出会ったのは、6カ月前。

俺が話したことのあるのは、2回だけ。

「あの、ちょっとどいでください」

「あの、消しゴム落ちましたよ？」

の2回だけ。

意気地なしのように見えるかもしれないが、それは事実であり、俺は意気地なしなのである。

彼女をただ後ろの席から、ぼーっと眺めるだけ…。

俺はそれで、最高な気分になれるのだ。

人は馬鹿馬鹿しいと言つだらう…。

しかし、それは俺にとっては、それすら恐れ多い事なのだ。

彼女は云わば、学校のアイドル。

彼女を好きでいる人間は実に多く、俺もその中の1人なのである。

そう、俺達の仲にはそれだけの差があるので…。

だから、臆病で意氣地なしな俺に、声なんてかけられるわけなかつた…。

そり、、、

あの田が来るまでま…。

深い深い夢の中、

俺は小さな妖精に出会つた。

「ヒガシキニ～」

「お前、今日暇？」

「いつは俺の友達、斎藤優^{さいとうゆう}。

俺をどこかに誘おうとしているらしい……。

しかし、俺は都合があったので友達からの誘いを断つた。

俺の生活は、あの夢を見て一変した。

みんなからモテるようになり、人気者になることができたのだ。

それがあの夢のおかげかは、わからない。

しかし、あの夢の後に、俺の生活が変わったということだけは言える。

俺が夢で見たのは、小さな妖精。

そいつは、緑の髪で赤い目。

そして青の服を身に着けていた。

俺はそいつに「夢は何?」と聞かれ、「祥子と結婚する」と言つてしまつた。

叶う」とのない夢…。

俺はそんな戯言たわいとを妖精に言つてしまつた。

しかし、妖精は何食わぬ顔で答えたのだ。

「わかつたわ」

「あなたの夢を叶えましょう

「ただし条件があるわ」

「それはあなたの よ

つと

「あなたの よ」の部分は覚えていないが、妖精ははつき

りと「あなたの夢を叶えましょう」と言つた。

俺が思ひこ、夢の内容を1～10まで把握している人間はないだろう。

俺のそれも同じである。

だから、俺はその夢を意識することなく、朝を迎え、そして学校に向かつた。

すると、外見からは何も変わらない俺…。

しかし、内側が変わっていたのだろうか？

俺は一夜にして、人気者になった。

俺は、そういうものになれたことに舞いあがり、祥子からの交際の申し入れを受けたのである。

この俺が？

そう、丶、丶

この俺があるのである。

俺は人気者というポジションに成り上り、告白された。

それが、俺の夢に向かっての第一歩だった。

だから俺は、優からの誘いを断つた。

なぜなら、その日はデートだったから…。

祥子とのデートだったから…。

時は満ちる。

俺と祥子の結婚式…。

俺は格好よくキメテ、祥子とキスをした。

永遠という鐘が協会に鳴り響く…。

その時は、そのように思えた…。

深い深い夢の中、

俺は不思議な不思議な夢を見た。

俺の人生を告げる夢。

悲しいけれど、俺の最後。

「それはあなたの命と交換よ

」

夢中（後書き）

どうでしょつか?
短いと思いまよ…。
すみません。

短編なので短いですが、それでもいにならニクエストへだせーーーー

俺は変わらない愛を持ち続ける」とことで、大切な何かを失った。（前書き）

題名は適当です（笑）

俺は変わらない愛を持ち続ける」と、大切な何かを失った。

次の一言で、俺達は終わってしまった。

君はどこに行ってしまうのか？

君はどこに行ってしまうのか？

俺は君を想い、涙を流すことになる。

君が乗つてしまつた列車には、俺の影はどこにもない。

次に会つ約束もしないで、君はどこに行くるのか？

最後まで、不機嫌な顔で俺を見つめないでくれ。

今更になつて、今更になつて、別れたこと今氣付くなんて、

お互に同じ場所を目指し、間違いはないと、手を繋ぎ合わしたけど、

気付かぬ間に、君の手を俺は振りほどいていたね。

違う道を選んだあなた、もう後戻りはできないから、

大粒の涙を浮かべたまま、君は足跡を残すよつに行つてしまつた。

どこまでも、馬鹿な俺。誰よりも、愛してる。

ねえ、俺は、君のどこかで生きてますか？

会いたくて、会いたくて、

会えない中でも、会いたくて、、、、

君へ道しるべを、今示してよ。

春は桜の下で誓つて、夏は海で過ごしたね。

秋は優しくて風も薫る、冬はより2人距離も狭く、、、

ありきたりの場所に行き、ありきたりのデートをし、

ありきたりの終わりを迎えた、ありきたりの2人。

当たり前が幸せすぎたから、当たり前になんか離れられない。

そんなことはわかっている事実。

けれども、不安の中で生きる俺達2人。

恋をして、恋よ去れ。

愛を妬い、愛よ滅べ。

そつと、恋人を抱き寄せることもできない俺。

その情景は、いつまでも変わらずに、

俺達2人は、愛をゆづくと失っていく。

どこのまでも、馬鹿な俺。誰よりも、好きでした。

ねぇ、俺は、君のどこかで生きてますか？

会いたくて、会いたくて、

会えない中でも、会いたくて、、、、

君へ道しるべは、後どれくらい？

話せばいつも分かり合つ2人だった。

ただ、言葉疋らざが絶えず、また、別れを繰り返すばかり…。

無条件で別れなければならぬ無常さ。

手を伸ばすこともできない、臆病な俺。

この日のかのリングは、どこかに置き去つたま。

最後になるけれどよ、『スマスマ』、ホント『アリガト』

忘れる」とのできない恋。

変わることのできない恋。

俺は今、君に向も言えなくて。

ただ、それだけで、、、

俺は変わらない愛を持ち続ける」と、大切な何かを失った。（後書き）

曲を参考にしましたが、変ですね。
すみません…。

呪いのチャーンメール（前書き）

今回は、チャーンメールが題材です。
またもや変な文ですが、宜しくお願ひします（^_^）

呪いのチェーンメール

皆さんは、呪いのチェーンメールを「存じでしょうか？、

それは、人を殺す薬…。

そういうわれるものの類です。

しかし、『ただの薬』と言つのには少し、語弊がありますか、、、
正しく言つならば、それは『呪いの薬』なのです。

『人が人を呪い殺せる』

それがこのチェーンメールのキヤツチコピー。

あなたもおひとついかがですか？

人が人を呪い殺せる魔法薬を

／／／

ここはある地方の村である。

人口の大半は老人で、私はその村で少数派に当たる子供である。

『呪いのチエーンメール』

この言葉が私の耳に入るのは、まだずいぶん先のこと…。

だから私も知らないで、無邪気に村で遊んでいた。

ある日のことである。

私は村を出ることになった。

若者の人口が少ない…。

これが原因で、学校が無くなつたからである。

名残惜しいが、私は隣町に引っ越すことにした。

転校初日、、、、

私はクラスの皆さんに「よろしくお願ひします」と大きな声で伝えた。

私は、もともと明るい性格であつたためか、クラスの輪すぐに入ることができた。

そして、転校から約一月、私には長岡香澄ちゃんながおかかすみという親友ができた。

学校では一緒に居て、家に帰つてからもメールで会話。

現代人に代表できる、意思疎通の仕方[…]。

私は田舎の子から、都会の子に変わつてしまつた。

田舎にいる時は、ケータイなどといつ代物は持つていなかつた。

しかし、都会といつものが私の生活を変えた。

時は流れ、私はそんな中学生活を卒業し、高校生となつた。

そんな私の周りを取り囲むのは、いわゆるギャル。

そんな中にはいる私も、ギャル。

私はギャルメイクに、少し流行に逆らつてルーズソックス。

そんなファッションで学校に行っていた。

そんな人間ばかり集まる学校なので、周辺からは『金を払えば行ける学校』といわれていた。

今更、田舎の生活なんて思い出したくもない。

はつちやけることもできないし、田舎なのでプロの一つも存在しない。

そんな私は、親から馬鹿にされ、世界から馬鹿にされていた。

そんな私の平凡な人生に流れ込んできた、一通のメール。

「あなたは嫌いな人間がいますか？」

「」のメールを読むと人は呪われます。

呪われたくないのならば、読まないでください。

まず始めに、嫌いな人を想像してください。

あなたはその人が、今何をしていると思いますか？

自分の好きな人とデート？

金を使い、好きなものを買つてている？

苦しみの中で叫んでいる？

誰かにセヨナリを言おうとしている？

さて、その誰かとは誰でしょうか？

あなたが嫌いな人はあなたを憎んでいる。

あなたを殺そうとしている。

さてあなたはどうしますか？

最後に、このメールを3人の人にお送りください。

そうすれば、あなたの思い通りに行くでしょう。

私は、世界を想像した。

世界は、私を馬鹿だと言つ。

それは事実かもしねない。

けれど、私も1人の人間である。

「馬鹿」と言われば頭ごくるし、傷つきもしたります。

だから私は、世界を想像し、そして誰もいない部屋で呟いた。

「あーあ

「世界なんてなくなっちゃえばここに…」

これが馬鹿なことだといつゝとは、わかっている。

けれど、この時ばかりは言わずにはいられなかった。

その理由は、つい10分前に親と喧嘩したからである。

「なんでお前はいつもいつも、、、、」

私だって、怒られたくてしたことはなかつた。

友達と遊んでいたら、深夜徘徊で捕まつた…。

それで、何回か警察にお世話をになり、その件で怒られた。

友達に誘われたら、一度と遊びにいなで誘つてくれない。

そうしなければ、一度と遊びにいなで誘つてくれない。

だから、私はOKを出したのだ…。

それなのに、、、

それなのに、、、

涙が止まらなかつた…。

けど、悲しくなんてなかつた。

ただ、自分が惨めに見えただけ…。

ただ、それだけだつた。

苦しい。

私の心が、そう訴える。

辛い。

私の心が、そう叫ぶ。

もう嫌だ。

私の心が、そう泣く。

誰か助けてよ…。

誰か助けてよ…。

誰か助けてよ…。

私はそう思いながら、メールを3人に送った。

決して、返信は来ない…。

私が世界滅亡を望んだから。

私の願いが叶ったのだ。

誰にも、何も言われない世界…。

そういうものを、私は創造したのだ。

呪いのチエーンメール（後書き）

終わり方が変で申し訳ないです。

「だこやき」の重版だ。 。 。 (前書き)

十二月、 四文字の言葉、 鍵

の三つで書きました^ ^

小説の予定でしたが、 すみません、 、 、

「だこやき」の重慶だ。。

君の行つてしまつた、あの十二月^{せがい}。

俺にはまったく見えないよ。

悲しまぎれに、夢は見るけど、

俺は一年、君はアルファ、、、

そんな毎日が嫌になつて、君を想い、刹那に心へ。

けれど、見えない、聞こえない、感じない。

君の想いは、中で感じる。

君の心は、閉まつたままで。

愛おしいほど、求めてしまつ。

愛おしいから、求めてしまつ。

君は何処で何してゐ?

『死んじまいたい』

それが願い。

『君に逢いたい』

これが本望。

なのに何故か、苦しくなるよ。

心が痛い。想いのほどに。

俺は涙を拭えない。

君に触れることもできないからね。

“ たいよう ” みたいな笑顔が好きで、 、 、

そんな君を求めて、ひたすら進む。

君に向かつて、猪突猛進。

『 笑顔が見たい 』 それだけで、 、 、

心のドアは、閉まつたままで。

俺にはできない、
術がないから。
すべ

鍵穴は錆びつき、鍵もなくて、、、

『君に逢いたい』 それだけで、、、

いつか俺にも見えるかな?

死に様覗かせ、死後の十三月。

君の住んでる、あの十三月。^{せかい}

時は止まり、老いはない。

涙はあつて、俺いない。

“だいすき”だけは、言わせてよ、
、
、

生きてる間に、言えなかつたけど。

それが、俺の全てだから

「だこやき」の重版ね。 。 。 (後書き)

今気づいた。

この短編集、謝つてばっかだ…。
だけど、言わせておくれ。 。 。

ヘンですみません^ ^

遙か

僕が君に恋をしたのはいつだろ？

それは、成人式。

僕はそんな20歳はたちという区切り田で、“君への想い”を思い出した。

「和穂はさ、今日ヒマ？」

僕は、クラスで友達と話す君を眺めていた。

もともと友達が少ない僕には、君がとても羨ましく思えた。

それは、君がクラスにとつて必要な存在だから。

それは、君が僕にとって必要な存在だったからだった。

そもそも、小学校に入学当初から、君は僕にとってアイドル的存在だった。

僕が君と同じクラスになったのは、1年と2年と5年の3年間。

僕は影の薄い存在だったから、君はどうせ覚えてもらえないだろう。

それぐらい僕の存在は小さくて、君の存在は大きかった。

そう、

君を「アイドル」と思っていたのは僕だけじゃなく、学校全体がそうだった。

君は誰が見ても可愛らしかった。

街1つ歩けば、誰もが振り向く存在で、それは高校になつても変わらなかつた。

そう、君は気付いていたかな？

僕と君は、中学こそ違つたけれど、高校が同じだったといつこと

を…。

僕は、君と高校で出逢えてとても嬉しかった。

君とは結局、同じクラスになることはできなかつたけれど、それでもいいんだ。

君の笑顔を時々でも見れたんだから…。

僕は、君をいつも心のどこかで追つていた。

それは、好きだから。

大好きだったから。

君が可愛いといつより、綺麗に変わつた高校の時。

そうだな、丶丶

確か、2年の夏だつた気がする。

とにかく、それぐらいの時に、君に彼氏がいるといつ噂を聞いたんだ。

とても悲しかつたよ。

けれども、嬉しいとも思えた。

だつて、君が幸せになれるんだから…。

君が幸せを掴もうとしているんだから…。

だから、僕は陰ながら応援することにしたんだ。

けれど、その噂は所詮、噂でしかなかつた。

そう、君には彼氏がいなかつたんだ。

僕は『なぜだらう?』と思つた。

貴、君は好きな人がいるということを聞いたことがある。

それも噂だけれど、それが本当ならば、君はその人のことをずっと思つているのかな?

それは誰なんだらう?

僕と同じで、君も片思いをしているんだ。

僕は、少しの時を刻み、理解した。

僕は君の前に立つ勇気はないけれど、君の背中を押すことはできるということを。

けれど、気が付けば時間は早く進んでいた。

成人式、、、

それは、僕を高校以来に君と引き合わせてくれた。

結局、君の背中を押すこともできなかつた惨めな僕。

そんな僕の隣には、小学校と中学校が一緒だつた晃しがいなかつた。^{あきら}

けれど、君は違つた。

君の隣には、たくさんの人があつた。

『ああ、僕もあそこに交じれればいいなあ』

僕はそう思つてしまつた。

だから、僕は君への想いを思い出してしまつたんだろう。

『 大好き 』

これは僕が心の中で、君に何度も描いた想い…。

伝えることができなかつた、決して伝えよつとしなかつた、頑固な汚れ。

けれど、今の僕は、君に向かつてこれから言つだらう。

君に向かつて、一步踏み出したんだから…。

遙か（後書き）

「終わりなき恋」になんとなく似てる気がする。

いつか続きを書きたいね……。

人は嘘つき、君は自己中、私は邪魔者、儚い絆（前書き）

変わった作品を作ってしまった。

何なんだろうか？

人は嘘つき、君は自己中、私は邪魔者、儂い絆

人は皆嘘つきである。

長く連れ添つた相手も、簡単に嘘をつく。

君はどうだろうか？

今まで生きてきた中で、嘘をついたことが一度もないだろうか？

自分は少なくとも、ある。

それは、たとえ冗談と言える質のものだろうが、嘘は嘘なのである。

もし嘘をついたことがない人がここにいたとしよう。

その人は、これから先、嘘をつかないだろうか？

そう、一度もある。

絶対と言つていいだろう。

人は生きている限り、人を騙すのである。

絶対に、かつ真理的に。

しかし、そういうている自分はどうだろうか？

嘘をついた揚句、人を信じることもできない。

そう、、、人は人を信じることなどできないのである。

それは、どこかに“疑い”という防衛本能が働くから…。

それもあるだろうが、結局は他人事なのである。

自分は嘘をつかない。人を信じれる。

それは偽善であり、ありえない事なのである。

そう、、、所詮は戯言でしかないのだ。

結局、私の言いたいことは、人間は嘘つきで、人は人を信じれないということ。

しかし、人を信じないことは、決して悪い事ではない。

それには、自分を守るという行為も入っているからである。

* * *

「来週の月曜は、みんなで打ち上げしようね」

「やーちゃんも来るでしょ?」

「そう、私に声をかけてきたのは、3年間を同じクラスで過ごした、
相葉香奈穂。あいばかなほ

私達3年生は、来週の月曜で、並河中学校を卒業する。

それは、もう最後になるかもしけない、みんなとの集まりの日。

だから、私も行くことに了承した。

行かないとい、もう会えない気がして。

だから、私、水谷紗枝は参加することにした。

しかし、約束の日、約束の場所に着いて、いくら待っても、1時
間待つても、みんなは来なかつた。

どうしたんだろう?

私はその当時、携帯を持っていなかつたので、連絡も取れずに周
りをうろついた。

しかし、いくら待つても来なさそうだったから、私はトボトボと帰ることを選択した。

けれども、^{それ}選択のせいで私は余計なことを知つてしまつ。

幾分か歩くと、私はたまたま香奈穂ちゃんに会つことができた。といつより、近くを歩いていた。

私の數十m先、香奈穂ちゃんたちは笑いながら歩いていた。

おかしいな？

みんなはじつやつて集合したんだろう？

私はそう思つた。

しかし、香奈穂ちゃんは私が思つてもいなかつたことを口にした。

「やつぱあ、紗枝連れてこなくて正解だつたよね」

「あいつ、ノリ悪いから、いろいろとメンドーんだよねえ

「そう思わない？」と

。

正直、悔しかつた。

私は、友達だと思っていた。

それも、仲のいい親友だと。

けれども、香奈穂ちゃんは、 、 、

いいや、香奈穂は私を邪魔者だと思っていた。

卒業式だから、もう会わないから、私を誘つだけ誘つて、待ち合
わせに行きもしない。

私など、不要な存在だったのだ。

そう思われるのが、 、 、

いいや、そう愚られたのが悔しかった。

けれども、もういいんだ。

所詮は人間関係なんて、それだけの絆なんだから。

永遠だと思っていた私の人生

私の手は、君に触れるためだけにあって、
私の指は、頬を感じるためにだけにあって、
君を見つめる幸せを、日々の中を探し続けた。

輝く星は、私達を見つめ続けるためだけにあって、
照らす太陽は、一緒にいることを証明するためにあって、
私と君は、夜に空を見上げて笑つてみせるの。

挫けてしまいそうな日は、いつも君が傍にいて、
悲しい時は、君が隣で笑つてくれていた。
でも、今はその君がいなくなってしまったんだ。

涙が零れ落ちて、手のひらから溢れ出そうとする時、
塞き止めることのできない辛さも、流れ出てしまうんだ。
だから、私は今夜、空を見上げて泣いてみせる。

君に愛されたから、君が愛してくれたから、

私は私になれて、私は私として生きることができた。

季節を運ぶ風よ、悲しみを拭い去つて、君を永遠に留めてよ。

あの頃に聞いていた、二人のラブソングも、
今では寂れた街角に流れている、ただの廃音になつて、
君の面影がそこにあると思うと、涙が零れ出でくるの。

昔、不意に君と田^だが合つて、唇を重ねあわせて、
愛し合つて、君を思い続けて、涙を流して、喧嘩をして、
仲直りして、君を好きになつて、君は守るつて言つたの。

青白くなってしまった君の顔、雲一つない青空、
君との思い出は、空の彼方に消えてしまったようで、
張り裂けそうな私の胸を、ただ君に抱きしめて欲しくて。

あの時、素直にありがとうございましたと言えれば、
今こんなに後悔することなんてなかつたのだろうか？

田覗めたら、これが全て夢だつたつことはないのだろうか？

街で道行く人ごみをぬつて、君を探していると、
君と眺め歩いた景色に辿り着いてしまつて、
君のことを思い出して、私は何度も涙を流すの。

ポロポロ零れ出る涙の数だけ、私は君を愛していたのかな？
私の愛は、君に伝わっていたのかな？
言えなかつた言葉も、言い続けた言葉も、届いていたのかな？

一人の恋のお話（前書き）

リクエストいただいたものですね^-^
では、よろしくお願ひします。

一人の恋のお話

よくある街の古本屋。

私はそこに本を買いに行つてみた。

その理由は、学校の宿題で『読書感想文を書け!』っていうのが出たから…。

正直、『高校生にもなつて、読書感想文はないっしょ…』って思つてゐる私だけれど、そんな私の気持ちなど、先生は反映してくれるわけがない。

でも、『めんどくさい』とやめてしまつのは私らしくないつていうか、好きではないので、私は仕方なく古本屋に向かうこととしたのだ。

でも、なぜ本屋ではなく古本屋かと言つと、その答えは實に簡単で『お金がないから』であった。

なぜなら、私には親がない。

去年、両親とも交通事故で死んでしまつた。

しかし、私には小学生の妹がいる。

だから、一生懸命バイトして、残り一人の家族を養つているわけだ。

幸いなことに、住む場所はあるし、両親は貯金もしてくれていたので、今のところ窮屈な生活はしていない。

でも、だからといって贅沢をできるほど余裕もない。

だから、バイトをして、高校だけは卒業できるように頑張っている。

そういひわけで、古本屋にやつってきた私。

『何の本を読もうかな?』

別に学校の図書室で借りるといつてもできたけれど、今は夏休みではないので、長い間借りることはできないし、買ってしまうのもになるので、妹に読ませてあげることもできる。

だから、私は買つことを決めたのだ。

でも、難しい本では妹は理解できないし、私としても、やつてしまはしたくない。

だから、私は、『ある程度わかりやすく、勉強になる本』を買おうかな?ってことで、本を探すこととした。

何分かして、私は、『これにしよう』っていう本を決めた。

「すいません、これください……。」

私はやがて、店員のおじこわやさんに囁ひて、「100円じゃな……」
つとそのおじこわやんは言つた。

「え~」の本は200円……、ですけど~。」

私は、お金を知つていて誤魔化すのは嫌いなので、ちやんとした
ことを言つた。

「やうじやな、、、確かにやうじや、、、、」

「しかし、今は100円じや、、、、」

「もともとその本は、いい作品ではあるがなかなか売れなかつた
のでな、、、、」

「それに、今どきの子がやうこつた本を読んでくれるのは嬉しく
てな、、、」

「、、、、だから、100円じや、、、、」

せうおじこちやさんが囁つので、「いいんですか?」と聞いてみた。

すると、「うむ、もあらんじや!」と言つてくれたので、私は100円だけ払つて帰ることにした。

『リッキー……こいおじこちやんだつたなあ』つと思ひ、浮かれながら帰つたと古本屋から出よつとした時、ふと、毛むくじやらの猫が道路の反対側を歩いているのを発見した。

そして、その時、『あー可愛い!』と、決して普通の人なら思わないことを、私は思つた。

だから、『この後暇だし、追いかけてみよ!』つと思つて、私は道路を渡つた。

しかし、幾分かして、いくつかの角を曲がつた後に、猫の姿を見失つてしまつた。

「那儿へ行ったの～」

「ケム君、出でおいで～」

と、勝手に“ケム君”と付けたあだ名を呼んで、私は毛むくじやらの猫を探した。

けれど、何処を探してもいない。

私は少し残念がつて、「はあ～あ」とため息を吐いてみた。

『なんで、いなくなつちやうんかなあ……』

私は内心、そんなことを考えながら、家に帰ることを決めて、信号のない交差点を右に曲がる。

ここや、右に曲がりましたんだ。

でも、「いったあ……」つと気が付けば、人にぶつかっていた。

それは、私も下を向いていて、私にぶつかった彼も、下を向いて歩いていたから……。

だけど、私はケム君に逃げられた腹いせもあって、少しカツとなつて文句を言つてしまつた。

「いやんと、前を向いて歩きなやこよね……」と。

でも、向ひつも悪気がなこのはわかっている。

だから、向こうから謝つたら許そうかと思つていた。

しかし、顔を拝見してみると、そのぶつかった人は、知らない人ではなかつたのだ。

というか、むしろ知つている人で、、、同じクラスの男子だつた。

「え？ まさか…」

そうやつて、思わず出でてしまった言葉。

私のぶつかつた相手は、私の好きな人だつたのだ。

そう、、、私とて立派な？高校生なのだ。

だから、好きな人の一人や二人、いても可笑しくはないのだ！

そういうわけで、好きになつてしまつた人にぶつかつた私。

『どうしたものか？』

そう一瞬考えたが、そんな時、「「」めん」と言われた。

「え？」

“ボケー”としていた私にとって、その言葉は意外過ぎた。

『悪いのは私なのに…』

そう思つたから、私は咄嗟に謝り返した。

「私「」めん、「」めん」

「私、今まであなたの「」ことが好きだった」

「「」え？？」

その言葉は一人が放つた。

私とて、そんなこと無いとは思つていなかつた。

だから、言われた向こうもビックリしただろ？

でも、もつとビックリしたのが、片思いじゃなく、両想いだつたところ」と。

想いは実つて消えていくもの。
それは一人だつた時のお話で、
これは、二人の恋のお話。。

こつもの場所と、変わらない道標

私はあなたが大好きです。

ただひたすらに、まっすぐ生きるあなたが、

昔の私を、今の私に変えていくてくれた。

私はそんなあなたが大好きです。

雨に打たれても、風に吹かれても、

決して挫けぬ、その力強い勇気と眼差し。

私はそれに惹かれて、あなたを追いつこうとを決めました。

あなたに出逢わなければ、諦めていた夢もあつたでしょう。

あなただから、私は笑って乗り越えることが出来ました。

愛に出逢って、愛を信じて、愛に破れて、愛を喪む。

愛を憎んで、愛を赦して、同じ愛を、また知ることでじゅうへ。

愛と別れ、愛を求める、大切とこつ言葉を、実感するのでしょうか。

私はあなたを想いつこじができるのです。

私だけに見ることのできる、あなたの良い面と悪い面。

そして、それを注意しようとする、強い決意と志。

私はそんな風にあなたを想っています。

痛くても、辛くても、決して諦めない、根性と気合い。

あなたが勝つときを得た、あの喜びと憂い。

壊れても、支えるから、ずっとずっと走っていて欲しい。

あなたに出会い、あなたを信じて、あなたに破れて、あなたを蔑む。

あなたを憎んで、あなたを赦して、同じあなたを、また知ることでしょう。

あなたと別れ、あなたを求める、大切といつも葉を、実感するのでしよう。

私にとって、あなたは人生の道標で、

あなたがいるから、私は歩むことができる。

それだけで、私は幸せを感じ、

再び、希望を持つて歩むことができる。

だから、変わらぬ心で、あなたはいつもの場所にいて欲しい。

虚と記憶、悲しこもまで。（前書き）

超久々の更新。

なんだか、忘れていたわけではないんですが、更新がおろそかになつていました。
すみません。

嘘と記憶、嘘と記憶 悲しこまで。

お前の隣でいつも過ごしていた俺。

お前の横では時は早く進み、離れれば離れるほどゆっくりになつていく。

これから叶える夢もあるし、俺は俺であり続けるために、永遠といつ時を君に捧げるつもりだった。

『俺はお前にだけは嘘は吐かない』

お前は知らないだらけ、それは、昔一人で決めた約束。

でも、お前は俺に何度も嘘を吐くんだ。

傷ついて我慢を繰り返しても、何も進まない世の中といつも現実は、俺に苦労という重荷ばかり投げつけてくる。

でも、それでも記憶は俺を呼び起こし、「キミヲキライ一ハナレナイ」と叫ぶ。

愛を偽られても、愛を失つたとしても、俺は君だけを愛していたの。

君は俺だけをこの場において、何処かに消えてしまうんだ。

離れていく背中、失っていく記憶。

そのどれもが俺に惨劇を見せようとしている。

それでも、俺は君に告げようとした「キミヲキラク一ハナレナイヨ」
という言葉を発する。

涙を流している俺が憎いか？

涙を堪えようとしている俺がウザいか？

本当に俺達はここまで関係なのか？

嘘だ！ うそだ！ ウソだ！！

夢なんかじゃない。 あれは、一つの確かな記憶。

いてもいいんだよ？ ずっと、俺の傍だけに。

どうか、俺を切ない記憶の中に、閉じ込めないでくれ。

例え、何処の誰が何て言つたとしても、正々堂々とした人生を送つた俺。

お前はいつも間違いばかりを繰り返すけれど、俺はそれでも愛していた。

過ぎ去た日を思い出すと、君の懐かしい、声と香りが甦る。

考えるだけで思ひのままの世界。

俺は今までじびつして、毎日独りの底で君を求めたのか？

心は覚めてしまつたけれど、君への想いは変わらないまま。

だから、前に進むことはするけれど、いつまでも俺は君を待つているよ。

嘘と記憶、悲しきままで。（後書き）

ちなみに、次話更新の予定も入ってはいませんので、その点を了りて
承ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4422u/>

尖角の超短編集//第二弾！！

2011年11月26日20時55分発行